

令和 6 年 5 月 11 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00354

研究課題名（和文）玉屋本を中心とした『日本書紀』の享受とその解明

研究課題名（英文）Enjoyment and Clarification of "Nihon Shoki" with a Focus on the Tamaya Book.

研究代表者

植田 麦（UEDA, Baku）

明治大学・政治経済学部・専任教授

研究者番号：30511539

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：新型コロナウイルスの影響で多くの研究活動が制約を受ける中、日本書紀の諸本調査も予定通り進めることができず、計画を縮小せざるを得なかった。しかし、この困難な状況の中で、生成AI技術の急速な進化が新たな研究展開をもたらし、日本書紀のテキスト解析に新しい方向性を示した。AIを使用してテキストパターンを分析し、統計的手法を用いることで新しい仮説を立てることが可能になり、文献解釈や歴史的事実の再検討において新たな可能性を見出せるようになった。この技術は、日本書紀研究の新たな地平を開くものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究は、AIを利用したテキストパターン分析により、日本書紀の新しい解釈が可能となり、学問的な理解が深まる。これは歴史文献研究の方法論に革新をもたらし、データ駆動型の歴史学の発展を推進する。社会的には、より正確な日本史の教育に利用されることで教育現場に寄与し、文化遺産の保護と価値の伝達にも貢献する。この技術は、学問のフロンティアを推進し、文化的アイデンティティの保存にも影響を与える可能性がある。

研究成果の概要（英文）：With many research activities constrained by the new coronavirus, we were unable to proceed as planned with our survey of the various books of the Nihon-shoki, and had to scale back our plans. However, under these difficult circumstances, the rapid evolution of generative AI technology has led to new research developments, and has provided a new direction for the textual analysis of the Nihonshoki. This technology has opened up new possibilities in the interpretation of documents and the reexamination of historical facts. This technique opens new horizons for the study of the Nihon Shoki.

Translated with DeepL.com (free version)

研究分野：日本文学

キーワード：日本書紀 古事記

1. 研究開始当初の背景

『日本書紀』は、720年に成立し、まもなく1300年を迎える日本の古典文学の代表的な作品である。その研究史は長く、弘仁年間(812年)からすでに宮中で講書が行われていたことが資料から確認できる。現在においても、活字化された『日本書紀』は多数刊行されている。

しかし、この1300年の間、『日本書紀』は常に一つの姿であったわけではない。写本系統には、ト部家に伝来したもの(ト部系統)と、それ以外の系統のもの(非ト部系統)が存在する。現在の活字化されたテキストは、すべてト部系統を底本としている。これは、ト部系統写本が1300年前の『日本書紀』の原態に近いとみられているためである。

『日本書紀』研究の多くは、活字化された本文やト部系統写本を底本としたものが大半を占め、非ト部系統写本は等閑視されてきた。もし研究目的が1300年前の姿を求めるだけであれば、非ト部系統写本の意義は小さいが、1300年間の通時的な研究には、非ト部系統写本を含めた全体像の把握が不可欠である。

また、『日本書紀』は成立以降、様々な思想や文学作品に多大な影響を与えてきた。例えば、紫式部は『紫式部日記』で、自身につけられた「日本紀の御局」なる呼称に不満を述べている。これは、『源氏物語』に『日本書紀』的な表現があることに基づくが、紫式部の知識は『日本書紀』そのものではなく、派生した二次的な言説(日本紀言説)に拠るものである。

日本紀言説に関する研究は、中古・中世の日本文学研究で行われているが、『日本書紀』自体が当時いかなるものであったかは、研究対象となることが少ない。

以上から、『日本書紀』研究の背景・問題点として、非ト部系統写本を対象とした先行研究の乏しさ、『日本書紀』が成立以降、文化史の中でいかなるものとして在ったかという視点の欠落が指摘できる。

2. 研究の目的

本研究では、平安期に菅原道真によって編纂された類書『類聚国史』と、非ト部系統写本の一つである「玉屋本」を研究対象とすることにした。また、玉屋本所収内容について、関連性のたかい周辺資料についても研究を進めることとした。

『類聚国史』は、特に巻第一と巻第二において『日本書紀』の該当部分をそのまま利用しており、『日本書紀』を二次利用したテキストであるといえる。一方、玉屋本は南北朝期の真言僧によって書写されたことが奥書から明らかであり、巻第一・巻第二では『類聚国史』が用いられている。また、玉屋本には他の『日本書紀』写本にはみられない改変箇所が多く存在し、それらは『日本書紀』以外の言説、日本紀言説、仏教説・神道説、歌学などの文脈を含んでいる。

本研究の目的は、非ト部系統写本を研究対象とすることで、『日本書紀』を取り巻く文化的・社会的要素を明らかにすることであった。これにより、『日本書紀』研究に新たな視座を提供し、日本古典文学研究の発展に寄与することが期待されたのである。

特に、玉屋本の話部分(神代巻/巻第一・二)では『類聚国史』が利用されていることから、『類聚国史』についての研究を深め、玉屋本の成立背景を明らかにすることを目指すこととした。また、玉屋本は原態の『日本書紀』から大きく隔たった内容を持つため、これまでの研究ではかえりみられることのなかった写本である。しかし、そのためにかえって、『日本書紀』享受の背景にある文化的・社会的背景を強く反映しており、『日本書紀』の1300年間を考える上で極めて重要な写本であるといえる。

3. 研究の方法

当初、本研究では神宮文庫・蓬左文庫・石清水八幡宮・天理図書館等の調査を予定していた。しかしながら、研究途中の2020年、新型コロナウイルスの大流行により、計画の大幅な変更を余儀なくされた。本研究は資料調査を行った上で、その調査の分析・検討を主たる内容として計画していた。つまり、調査ができなければ当初計画に基づく研究を進めることができない。

よって、心ならずも研究の大幅な変更を余儀なくされた。過去の研究において進めていた調査資料の分析を進めることにした。また、周辺資料に目を向け、『古事記』の研究を進めることで、当初研究計画を補佐的に行うこととした。

4. 研究成果

前述のとおり、新型コロナウイルスの流行により十分な研究を進めることはできなかった。現時点で公開を終えている研究成果としては、『古事記』の須佐之男命(明治大学教養論集 554

43-61, 2021-09-30)がある。その他のものとしては、現在、玉屋本『日本書紀』所収の「中臣
祓」の分析を進めており、近々に公にするべく考察を進めているところである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 植田 麦	4. 巻 554
2. 論文標題 『古事記』の須佐之男命	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 明治大学教養論集	6. 最初と最後の頁 43-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------